



Title	第一部 通史 . 第四編 キャンパスの変遷 . 第二章 札幌農学校北一条キャンパスの形成 一八七五 ~一九〇三年
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 253-262
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28164
Type	bulletin (article)
File Information	4(2)_253.pdf



[Instructions for use](#)

し、「教頭雇入相成候上へ更ニ北海道適宜ノ教則改議致シ度」と、マサチューセッツ農科大学のカリキュラムを参考に、教頭（外国人教師の招聘を前提としている）が決まった後、北海道に適したカリキュラムを編成していくことを伺い出ている（札幌農学校簿書〇二五）。そして、三月、仮学校の札幌移転が決定した。

以上のように、一八七五年の専門科開設は既定路線であったが、仮学校はカリキュラム面で教育機関としては不安定であるという判断があり、新たな組織として専門科に確固たるカリキュラムを導入するためには、実地札幌への開設が必要とされた。仮学校の札幌移転には、十分な教育効果を期待できない仮学校自体の清算という意味合いもあつたと考えられる。

一八七五年八月、仮学校は札幌に移転し、札幌学校と改称された。翌七六年八月、マサチューセッツ農科大学長 W・S・クラークを教頭に招き、専門科として札幌農学校が開校した。

第二章 札幌農学校北一条キャンパスの形成 一八七五—一九〇三年

一八七五年、札幌学校として開校したキャンパス（便宜上、北一条キャンパスとする）は、現在札幌時計台の位置する北一条西二丁目と北二条通、北二条西二丁目を中心に学校施設を配置し、さらに北一〜二条の西一丁目の区画の西側半分を含めた四街区を含む区域であった。西側を上川通（現西三丁目通）、南側を浜益通（現北一条通）、北側を札幌通（現北三条通）で囲まれた敷地で、校内諸施設は上川通側、つまり札幌本庁に対面するように建ち並んでいた。

他の官舎などと同様に敷地区画を土塁で取り囲み、南北一一〇間、東西一一二間二尺五寸、面積一万三四九〇坪（約四万四五〇〇平方メートル）を占める（越野武「札幌農学校の建築」、『北大百年史』通説、六二四ページ）。一八八五年十二月末には、一万三六二四坪と記録されている（『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』、以下『沿革史』と略す、九九ページ）。上川通側には表門と寄宿所通用門のほか通用門が一カ所構えられ、さらに、札幌通に二カ所、浜益通に一カ所通用門があった（p.a.003）（以降、『写真集北大125年』に掲載されたものは（p.a.）として図版番号を記す）。

第一節 札幌学校期の講堂・寄宿所

開校時の施設は、講堂（のちの北講堂）（p.a.005）と寄宿所（のちの寄宿舎）（p.a.004）の二つである。

講堂は、一八七三年に建設された開拓使外国人顧問宿舎の一つ、洋造弐邸（俗称ケブロン館）を、七五年五月改装起工、七月に竣工して転用した。建築面積は一一四坪四五八（『開拓使事業報告第貳編 勸農・土木』家屋表、六八四ページ）、洋造弐邸時代よりも三八坪余の増築であった。木造二階建ての古典的作風を示す建物で、柱葺き寄棟屋根、棟押さえの両端に開拓使のマークである五稜星形の棟飾りを飾る。下見板張りの外壁に、一階は三角、二階は櫛形のベディメント（破風）を飾る窓を配置し、鎧戸付き両内開きのガラス窓としている。主屋南側の張出し部分から廊下で連絡する東側増築平家部分は、軒飾りを付け、三角ベディメントを付けた上下げ窓と、主屋とは異なったスタイルで建設されている。洋造弐邸のような際立つた古典的作風は、七七年ころから、より簡素な洋風手法に変化しており、この増築部分もその傾向の一端といえる。

講堂は大小九室に分割し、うち五室を教場、他は校長室、教員室、書籍室とした（『沿革史』三二一ページ）が、

一八七七年に大幅に改修し、二階は、講堂製図室と理学・機械学の器械室各一室に、一階は予科教場三室と読書房とした（『札幌農學第二年報』三丁四ページ）。

この講堂は一八八八年五月に焼失し、翌八九年同じ位置に、旧講堂よりも規模の大きな木造二階建ての講堂が新築された。左右の翼部をやや突出したH型平面の建物で、キャンパスの南側に竣工した豊平館（八〇年）の外観に類似の意匠の建物であった。一九〇〇年には、階上は土木工学科教室、製図室、階下は動物学実験室、物理学器械室、農業経済学演習室、予修科教室、森林科教室、教官室にあてられた（前掲越野論文、六五二ページ）。

一八七五年八月に新築された寄宿所（p.404）は、建坪三七坪七四七、経費一万二七九〇円を投じて完成した。西側の平家主棟は、桁行一九二尺、間口三九尺、表門と寄宿所通用門のちょうど突き当たりに切妻屋根の玄関ポーチをつける。表門側は表玄関、通用門側が生徒用玄関として使用されたのかもしれない。主棟の東側の付属棟とは三本の廊下で連絡し、北側廊下に続く平家は、病室、物置、ランプ置所、靴製所など、中央廊下は便所、湯殿、割烹場に連絡し、割烹場に接する南側二階建て部分は、一階を会食所、二階を講堂とした。

「男生徒寄宿所絵図面」（附属図書館北方資料室蔵、p.409）によれば、中廊下を挟んで、東西に一五尺角の正方形の生徒舎を一四室並べ、ほかに生徒取締寄宿所（二室）、生徒支給品置所、応接所、学校掛詰所、小使詰所、物置、髪カリ所、湯吞所を並べる計画であった。生徒舎二室の間には暖炉らしきものもあるが、実現されなかったようである。なお、生徒舎の数について、『沿革史』では「生徒室二十四」とあるので、二階増築分六室を引いた一八室の生徒舎があったのかもしれない。

寄宿所の住み心地はあまりよくなかったようで、廊下や舎房の換気はかなり悪かったらしい。このことは、一八八一年二月一日付で農学教頭心得W・P・ブルックスが、「寄宿舎喚気改良の進言」を開拓権大書記官鈴木大亮宛にしていることから窺える（『北大百年史』札幌農学校史料（一）、五三八〜五三九ページ）。

主屋中央部の二階六室分の増築は、生徒増にともなうて、一八七七年八月に行われている。

第二節 書籍庫・舎密所

一八七六年八月、札幌農学校と改称し、十四日開校式が行われた。同年十二月、講堂の南隣、演武場予定地との間に、木造二階建て、建築面積一五坪の小さな書籍庫 (p.a.012) が建てられた。あわせて講堂内の書籍室は講堂に転換され、翌年九月講堂の改修の際に読書房が設けられている。桁葺き切妻屋根の質素な建物で、二階妻面の上下げ窓を除き、窓には鉄棒柵を立て込んでいた。また床下換気を考慮したようので、一階床面をやや高くしている。しかし、当時の教官と協議せずに建てられた (W・ホイラー「札幌農学校長調所広丈宛書簡」『北大百年史』札幌農学校史料(一)、三〇七、三〇一ページ) ため、木造であることへの防火上の不安や書籍庫と読書室が別棟であることの不便など、すこぶる不評であつたらしい。その後、九〇年十一月、書籍庫の前方にやはり簡素な書籍庫事務所 (p.a.012) が増築された。

一八七七年八月、校内の南東端、寄宿所の東側にD・P・ペンハロー設計の舎密所が新築された。木造二階建て、正方形平面の単純な建築であるにもかかわらず、史料によつて面積はまちまちである。「引継書・建築一覽表」(『北大百年史』札幌農学校史料(一)、六一四ページ) には総建坪二六坪とあるが、『札幌農學第一年報』では四〇平方英尺、つまり四四坪四四四である。方形屋根に二本の集合煙突を立て、西側に入口を持つ建物で、二階は講堂、機械室、「鉱鑛学地質学及ヒ化学採蒐物ノ陳列場」(『札幌農學第一年報』) の三室、一階は分析教場、定量分析室、天秤室、竈室の四室が設けられ、さらに資料類の保管庫、整理作業室が地階にあつた(前掲越野論文、六四九ページ)。農学校開設後に落成した重要建築物のはじめとされ、建築費及び薬品代を合わせて初年に約八〇〇〇円を要したと

いう(『沿革史』六九ページ)。

第二節 本草園と植物園・博物館

一八七八年二月、キャンパスの北隣、北三条西一丁目の開拓使勸業課の附属地三六〇〇坪と培養植物全部が札幌農学校に移管され、本草園とされたが、この敷地の北端には、七六年にL・ベーマー設計による四九坪一〇の木造温室(p.a.262)があった。前年には、校内敷地の東側に樹木園および灌木園が創設され、道産の樹木を植える計画も開始されていた。八〇年の配置図(p.a.002)により、西側は半円と長方形を組み合わせた幾何学的区画に園芸植物を栽培した植物園、東側は苗圃として構成されていたことがわかる。八五年十二月末で、二七〇〇坪と記録されている(『沿革史』九九ページ)。

この温室は、一八八六年十月三十日、現在の植物園に移築された(p.a.264)。

現植物園の設計は一八八三年に初代植物園長宮部金吾が着手し、翌八四年七月北海道事業管理局札幌農務事務所管の博物館と附属地一万五千余坪を、八五年二月には其接統官有地六一六十余坪を割譲され、八六年に概略竣成している。天然の風致を重視し、水系や巨樹などをそのまま生かし、九〇年には園内に自然分科園、樹木園、灌木園、温室附属園、試験園などを配置した。

博物館は、一八七七年、開拓使が北七条西七丁目借築園内に設けた仮博物館に始まるが、八〇年には旧牧羊場に博物館(p.a.258,259)が計画された。設計はボストンの建築家ベートマンに依頼された。木造二階建ての建物は、中央の二階建て部分の左右に一階下屋を付加した構成で、丁型平面とあわせて、教会堂に一般的に見られるバシリカ形式を援用している。また、正面からみると三つの破風が並び、玄関ポーチ周りの細部意匠や星形紋章の配置な

どとともに、それまでの開拓使の建築とは雰囲気の異なる華やかさが感じられる。八一年に着工、翌八二年六月に竣工するが、直前の二月に開拓使が廃止されるので、開拓使最後の作品ともいえる。

博物館の名称は、一八九五年に博物館となる(『札幌事始』)。博物館時代の建物としては、ほかに倉庫(p.a.18)や便所などが残っている。事務所(p.a.266,617)は一九〇〇年、門衛所(p.a.267)は一一年に建築された。倉庫は一八八四年に建築されたが、事務所の新築にともない曳家された。現在の腰折れ屋根の小屋裏利用型の外観は後の改変で、創建時には桁葺きの切妻屋根であった。便所も同年に建てられている。

第四節 農覺園

札幌農学校開校式の翌九月、開拓使勸業課の属地三〇万四五〇〇坪が移管され、農覺園(p.a.286)と命名された。現在の札幌キャンパス(便宜上、北八条キャンパスとする)となる敷地の一部分であり、一八八五年末には、「北七条番外地 農園 一四六万七千一八八坪」の規模となっている。学生の農業実習用に供するため、園内にモデルバーン(模範家畜房)のほか厩舎や穀倉等を建築し、農業現術実習の場所とされた。畜力農具や外国種の牧草・家畜を導入し、洋式有畜農法の北海道への普及拠点となった。九〇年サクシユコトニ川南東の土地・建物が札幌同窓会に払い下げられ、札幌同窓会第一農園と呼称されたが、九五年に農学校に寄付され、第二農場と命名された。

一八八二年までに設置された施設の内、模範家畜房(七七年、p.a.333,314)、同建増(現種牛舎、八二年)、穀物庫(玉蜀黍貯蔵場、七七年)の三棟は、一九〇九—一〇年に移築され、北一八条の現第二農場内に現存している。ほかに、興味深い施設として、派出所(一八七九年)、器械庫(七五年)、大工細工場(八〇年)、製糖所(七九年)、排水管製造所(七九年)、同焼竈(七九、八〇年)、鍛冶細工場(八〇年)、燻肉製造所(八二年)などがあった。

排水管製造所は、排水瓦管製造のための施設で、建築費六二四円九八五、三〇尺四方の平面の一方に六〇尺×一五尺の長方形平面の建築を接続していた。中央の正方形部分に馬二〜三頭で回転させる砕土機を置き、長方形平面の建物には製瓦器械、煉土盤、乾燥棚などが置かれ、近くの焼竈で一日二〇〇〇〜三〇〇〇個の製品を製造していた(『札幌農學第三年報』一七ページ)。

同年建設の派出所は、木造二階建て、建坪三一坪、事務室、職工居室三室、厨房、浴室、食器室などで構成され、一二七〇円八五三で完成したが、当初二階は未完であったという(『札幌農學第三年報』三三ページ)。

サクシユコトニ川西側、現文系校舎付近の農場は、一八八七年に北海道庁から移管された札幌育種場で、同年設置の農芸伝習科の土地・施設として転用された。九五年に第一農場と改称し、農芸伝習科ばかりでなく札幌農学校生徒の農業実習や試験栽培にも利用された。一九〇一年の配置図(p.286)に見られるように、牛舎、牛酪製造所、綿羊舎、厩などの主たる農場施設は口の字型に配置され、官舎や生徒寄宿舎(p.293)、器械庫、事務所、教場(p.288)などは、川の東地区に配置された。第一農場は、北八条キャンパス新校舎建設に伴い、一九〇一年以降、理学部北側一帯に移転した。

第五節 演武場と観象台

一八七八年十月十六日、開拓長官黒田清隆、校長調所広丈臨席の下、演武場の竣工開業式(p.206)が挙行された。講堂と寄宿所との間、キャンパスの中央、現在の北一条通の路上と北側付近に建設されたこの演武場(p.208)は、同年六月に着工された。建坪一三三坪五五、玄関ホール二坪七七五、階上は操練室、武器室、階下は博物標本陳列室と標本整理室、玄関ホール左右に二教室を配置した。階上の操練室は、兵学教練のほか、雨天体操場として、

また卒業式や集会、講演会場などの文化施設としても利用された。一九〇一年五月十四日に挙行された創立二五年記念祝賀会（p.a.605）もこの講堂で開催されている。

演武場の外観は簡素で装飾も少ないが、アメリカで流行したカーペンターゴシックと呼ばれるスタイルの特徴の一つである軒先の飾り歯形飾り（バジボード）が採用されている。屋根上には、現在の時計塔よりもずっと小さな鐘楼がのつていた。一八八一年五月、ハワード社に注文の時計が予想以上に大きく、玄関正面部を壊し鐘楼を撤去し、基礎部分から時計塔の改造工事を開始、同年六月に農学校教師C・H・ビーボデイの監督の下で大時計が取り付けられ、八月初めに作業は完了した。経費は一三二九円六八二であった。取り付けられた大時計と連動する自鳴鐘は、市民に正確な時刻を知らせる標準時計の役割も果たした。

時計の修正には当時の平均太陽時をもとにする必要があり、そのために天文観測は不可欠であった。一八七九年五月に講堂の北側前面に設けられた八角形平面の観象台（p.a.033）は、天文学の授業に使用されたほか、経緯度の天測から正確な時刻を測定した。観象台には翌八〇年、転鏡経緯儀が備えられた（秋月俊之、札幌農学校と時計台『時計台』二二七ページ）。

演武場の時計については、一八八三年、炭礦鉄道事務所から停車場の標準時あわせにそれまでの地理課時計から札幌農学校の時計に変更する申し入れがあったというエピソードも残されている（『北大百年史』札幌農学校史料（一）、六五八ページ）。さらに八八年一月には、演武場の大時計は、札幌の標準時計とすることが告示されたが、このころには観象台はあまり使用されず、九三年には完全に破損し（前掲秋月論文、二二九ページ）、九七年前ころには姿を消したという（前掲越野論文、六五一ページ）。

これまで紹介した諸施設のすべてが写る写真は今のところ見つからないが、開拓使編纂『北海道志』巻二七（一八八四年）所収の鳥瞰図的絵図（p.a.014）で、八二年前ころのキャンパスの概要を知ることができる。その後の変化

としては、新北講堂（八九年）の改築くらいである。

第六節 開拓使廃止後の札幌農学校キャンパス

札幌農学校は、一八八二年三月に農商務省所管、同年七月農商務省農務局に、さらに翌八三年二月農商務省北海道事業管理局に転轄されている。八六年一月の北海道事業管理局の廃止、北海道庁の設置に伴い、二月二十八日には北海道庁管轄となり、九四年に文部省直轄学校となり、翌九五年四月一日文部省に転管された。こうした管轄の変化はキャンパスの変化において大きな要因とはならず、一九〇三年七月三十日、農藝園のあった現在の大学敷地に、北八条キャンパスの新校舎群が竣工し移転するまで、ほとんど変化はなかったといえることができる。

北八条への移転の理由は、北一条キャンパス周辺の市街地化が進み、敷地も狭隘になったこと、学校施設の傷みが激しくなり、たびたび改築の要望が出ていたが、大学昇格運動の起こっていた学校敷地としてはふさわしくない、火災の危険がある、市区改正によって農学校敷地が分断される、などの背景があった。施設の老朽化は、すでに一八八五年にみられ、校舎や演武場は「土台木材ニシテ朽腐シ稍稍々傾斜ヲ見ルニ依リ」（『北大百年史』札幌農学校史料（一）、七七九ページ）という有様であった。

一八九二年大火直前の様子を示す九一年「札幌市街之図」（『札幌歴史地図（明治編）』一七ページ）でみると、北一条通の南側に豊平館（八〇年）、創成小学校（七六年）、北一条西三丁目札幌尋常師範学校（八三年）、同附属小学校、さらに北一条西三丁目札幌女学校・女子小学校（八九年）など、一大文教地区を形成していた。

キャンパスが、北八条に移転後、新北講堂は、辺見病院や創成病院に転用され、一九五五年頃まで遺存していたという（前掲越野論文、六五二ページ）。演武場は、一九〇六年八月買収費一〇〇〇円で札幌農学校から札幌区に

移管されるとともに、北二条通敷設のために、元の位置から南側へ約一〇〇メートルの現在地へと移築された。その後何度か移転問題が現れては消えたが、いまや市民に親しまれる歴史的建造物としてばかりでなく、北海道大学誕生の地として、札幌農学校北一条キャンパスの痕跡を残す唯一の記憶となっている。

第三章 北八条キャンパスの誕生

（札幌キャンパス第一期）一九〇三—一九一八年

本章で対象とする、後期札幌農学校および東北帝国大学農科大学時代の建築については、先に越野武による詳細な報告があり（前掲越野論文）、諸建築の概要にとどまらず、設計者やキャンパス計画についての考察も行なわれている。しかし、この報告の暫く後に、北海道大学事務局の図面倉庫より、この期間の諸建築に関連する建築一件書類が発見された。建築一件書類とは、建築工事に関わる入札・落札などの契約関係書類、仕様書、積算書などの簿冊のほかに設計図面も含んだ一連の書類のことである。この史料により、設計母体である文部大臣官房建築掛札幌出張所と本省との関連、入札および落札の様子、施工者、各建築の細部意匠、仕様変更の様子などが明らかとなった。そこで、本章では、先の報告との重複を避けることも鑑みて、新規発見史料から得られた知見を紹介することに重点を置き、論を進めることにする。